



鎮守の森だより

NPO法人社叢学会ニュース

第113号

2021年9月1日

！！ 10月の秩父大会は 来年(2022年)6月に延期いたします！！

10月23日(土)・24日(日)に開催を予定していた秩父大会を、来年6月に延期することといたしました。研究発表者、シンポジストも決まり、いよいよ参加者募集を始める矢先のことではありましたが、昨今の新型コロナ感染症の首都圏のみならず全国的な爆発的蔓延はもとより、見学会の目玉であります三峯神社も、今年一杯の参拝停止に追い込まれました。こうしたことに鑑み、断腸の思いではありますが、10月の開催は断念せざるを得ないという結論に至りました。事情ご検察の上、悪しからずご了承くださいますようお願いいたします。

宮脇昭・当学会顧問(93歳)ご逝去

当学会発起人で、発足当初より顧問をお勤めいただいた宮脇昭氏が7月16日に死去された。

ドイツ留学で、土地本来の植生が病気や災害に強いなどとする理論を学び、災害から人命を守り、動植物の生態系を育む防災環境保全林づくりの重要性を呼びかけた。土地本来の樹木を調べて植える植樹方法は「宮脇方式」と呼ばれ、40年以上にわたり、企業や自治体などによる環境保全のための植樹の指導に尽力した。

社叢については「その土地本来の潜在植生は、

「鎮守の森」を調べればわかる」と述べ、東日本大震災に際しても、各地で鎮守の森が残っていることに着目し、受け継がれてきた鎮守の森づくりの知見と、植生学・植物生態学をふまえ、あらゆる自然災害に耐える21世紀の鎮守の森をつくることが重要だと提唱している。

著書に『緑環境と植生学—鎮守の森を地球の森に』(NTT出版)『鎮守の森』(新潮社)など。

氏が2002年の当学会設立総会に寄せた一文「ふるさとの森を創る」を下に掲載する。

人類文明の歴史は、森の破壊・消滅の歴史であった。限られた島国で、時に襲う地震・台風などにおのきなながらも、日本人は、集落、町づくりの際して、森の皆殺しはしなかった。必ず、土地本来の森を残し、創ってきた。

「鎮守の森」に象徴される潜在自然植生判定の生きた基礎資料にも使える森、樹林は、新しい都市化のもとに、急速に荒廃・消滅を今強要されている。残されている各地の社叢などを手がかりに、日本の伝統的鎮守の森とエコロジーの知見をインテグレートした21世紀の、さらに次のミレニアム(千年記)までも生き残る“ふるさとの木によるふるさとの森”の再生を進めている。

現在までに、国内で700余ヶ所、ボルネオ、アマゾン、北京の万里の長城沿いなど1,000ヶ所以上の“鎮守の森を世界の森へ”と日夜努力している。しかし、面積的には限られている。単に防災・生態環境林として、ローカルからグローバルに機能するだけではない。4000余年自然と共存してきた人々の、いのち、文化を育てる心、感性、生まれてくる子供たちの遺伝子資源をまもる鎮守の森は、同時に人々の魂(たましい)の宿る癒(いや)しの森でもある。

鎮守の森の、現代の科学・技術だけでは解明できない、深い意味と機能を、すべての人たちが正しく見定める。共に額に汗し、大地に手を触れ、エコロジー、とくに植生生態学的な地味な現地調査にもとづくシナリオに沿って、足もとから世界に鎮守の森を地球の森に発展させたいと念じている。社叢学会の理論的と同時に実践的活動成果を期待しています。

今回の賛助会員神社社叢紹介は、鹿島神宮を取り上げる。鹿島神宮は2016(平成28)年の年次総会の開催会場で、見学会では北面する本宮を始めとし、鬱蒼とした社叢や、奈良の春日大社に分霊を載せて旅をしたとして尊ばれる鹿が遊ぶ鹿園、様々な伝説を秘めた要石やユーモラスな大鯰の碑など、境内をじっくり見学させていただいた。今回は総会シンポジウムでの、鹿嶋則良宮司による鹿島神宮社叢についての説明を再録する。なお、この総会の記録は『社叢学研究』15号に掲載している。

賛助会員神社の社叢

鹿島神宮



本殿背後にそびえ立つスギの神木

鹿島神宮

利根川下流北岸の丘陵地に鎮座する常陸国一宮。歴代天皇や貴族の崇敬が篤く、649(大化5)年、中臣氏によって神郡が置かれた。中世以降は東国守護の武神として崇敬され、現社殿のうち、本宮や奥宮、楼門などが徳川家からの寄進による。

創 祀：社伝によれば、神武天皇即位の年に、出雲の大国主大神からの国譲りに成功した武甕槌大神を讃えて祀ったことに遡る

所在地：鹿嶋市中2306-1

祭 神：武甕槌大神(たけみかづちのおおかみ)

昨日から皆さまこちらにお参りいただいて、本当にありがとうございます。

皆さまのお手元の、樹叢調査報告書の中の抜き刷り11頁からをご覧ください。実は私は平成6年にこの鹿島神宮に転勤してまいりまして、最初に気が付いたのは森がひどかったということです。皆さまにお配りした中にも書いてありますが、鹿島神宮の樹叢が天然記念物に指定されて、草一本抜いてはいけない、というような指示がございました。それをいいことに山の手入れを怠ってしまったのです。放っ

ておくとジャングルになってしまうのです。逆に手入れというのをきちっとしないといけません。

実は戦後昭和20年代、30年代ぐらいまでは町の人達が燃料を求めて山へ入りました。そしてその際にきれいにしていただいたのですが、そういうことがなくなってしまって、それ以降、山の手入れを怠って、草一本抜いてはいけないということで、神主さんが何もしないで過ごしていた。ということで、これではまずいよ、ということになりました。それで県の文化財課(?)の方へ行きまして、どうしたらいいのか相談しました。アズマネザサが高さ3mまで生い茂っていたのです。すると、森の中を散歩していても夏なんか中がむんむんしちゃって歩けないということでございましたので、文化財課(?)の方から先生に来ていただいて見ていただきました。そうしましたらアズマネザサは切らないとだめ、ということになって、まず我々神職ができる分からアズマネザサの駆除を始めました。しかし面積が広すぎて、予算をとるかということで、なかなか役所も予算をとるのに報告書を作らないと予算をくれないのです。それで報告書を作りなさいということで、筑波大学の先生とか県の森の関係の人とかたくさん集まって、調査をしまして、予算をいただくことができました、アズマネザサを全部駆除した、という経過がございます。

皆さまにお配りした最初の11頁に常陸国風土記ということを書いてございますが、この鹿島郡というのは、鹿島神郡、鹿島の神様のための宮ということで、常陸風土記に、「下総の海上国造の領内、軽野より南1里と那珂国造の領地寒田より北5里を割いて」、鹿島の神様のために鹿島神郡を作ったということが書いてあります。その中の神様の住まれるところがご神木のあふれる良いところということができる。その美しさを全部お見せすることができない。要するに神様が住まれるところであるというふうに書いてございます。

それから三大實録でして、実は鹿島神宮もお伊勢さまと同じで20年に一回、建て替えがございました。その建て替えるために、用材が5万余本、大工が16万9千人、そのようなことで、その材料を得るのが、鹿島神宮から200kmもある、常陸の国の中の郡から運んでくるということで、その道も険しいので、神宮の近くの場合にクリを5700本、スギは34万株を植えることを要望して、いざというときにはこの材料を使いなさいという指示を得て、そういう形でこの森ができてきたのだと思います。

日本の古文書の中で、植林の記事が出てくるのは、この三大實録のこれが初めての記事ということが出来ます。そのあと鎌倉時代の記事などがありまして、今から200年ほど前の鹿島神宮の絵図が書いてございますが、そこには入口の方がスギとマツ。それから社殿の前にもスギの巨樹があります。それから要石の方にはいきますとマツが生えている、ということで

ありますが、実はさきほど燃料として使われなくなったということで、林床が非常に腐食が進んだといえますかそういうこともありまして、昭和55年にマツが1953本、昭和56年にはモミが約2000本枯れました。マツは伐採しましたが、昭和56年のモミのご尊木は、私が平成6年に来たときには切らずに立ち枯れのままになっていました。ですから多くのモミが倒れていたり全く立ち枯れになっていたりということで、まず平成6年に県に相談をしますと、まずその森の中にいくつか散策路がいくつもあるのですが、それが全部モミが横たわって通れないという状況でした。まずそういう荒れたモミの木を処分することから始めまして、それから県から予算をいただいでアズマネザサを切って、現在のような森になったのです。

先ほどのお話ししました三大實録の記事というのは、皆さまにお配りした水色の本に東日本大震災で石の鳥居が壊れたという記事があったと思いますが、それを再建するにあたって、石でつくったのではまた倒れてしまうということで、木で作ろうということになったのですが、鹿島神宮の樹叢が天然記念物であって、また国の史跡になっておりますので、とても伐ることができないだろうと思っていましたが、この三大實録の記事を持っていきまして、何かあったら使うために植えたのだということをお願いしたら、許可をいただきまして、正面にあります鳥居は、柱は樹齢500年のものが2本、それから笠木といいまして、上についている木は樹齢600年のものを使っております。現在明治神宮で鳥居の建て替えということで、木を探しているそうですが、なかなか見つからない。実際に全国の森で、あれだけ大きな木を伐ることはできても山の奥すぎて運べないということが現状だそうです。鹿島神宮は森のおかげで、神様のおかげで、500年、600年のスギを鳥居として使わせていただいたということはほんとにありがたいなと思っております。どうぞ皆さまも触っていただき、ここで鹿島神宮の森で500年、600年も育ってきた木なのだなあと思ってください。たいへんな力をいただけると思います。どうぞゆっくりご覧いただければ、と思います。

鹿島神宮の森、先ほどの常陸国風土記も1300年も前に書かれた、その時から神様の住むところだ、と書かれておりますし、三大實録にも書かれているように、この辺りはたいへんなスギの林だったと思います。ところが明治になりまして国家管理という時代もございました。その時に、現在の森よりも3倍も4倍も鹿島神宮の森があったと思うのですが、上知ということで国に召し上げられまして、開拓地として一般の人たちに貸してしまうと、そこがどんどん開拓されてしまっていて、現在のものしか残っていないということになるのです。もともと神社は国家神道ということでもよかったのに、と思われるかもしれませんが、鹿島神宮のようなところでは、明治以降の国家神道は果たしてよかったのかと、疑問を思っております。あの時代、各殿様もみんな土地を召し上げになったわけですから、神社も土地を召し上げられてもそれは文句は言えなかったろうとは思いますが、鹿島神宮の森というのは、たぶん鹿島灘まで続いていたろうとは思いますが。その中でも一生懸命守ってこられたものを、我々が引き継いで次の世代にしっかりと渡していかなければと、思っております。

平成6年以降、先生方から意見をいただいた結果、現行のまま放置することに差支えない。問題はアズマネザサの繁茂であるから、これだけのことをしましょう、そのうちだんだんこの森はスダジイの森になっていきますというお話しを伺いました。これから専門家の先生方のご指導を受けながら、この大切な森をしっかりと次の世代に受け継ぎたいと思いますので、皆さま方にもご協力いただきたいと思います。

実は鹿島神宮の森、という本を出すために全部歩きました。それで直径1m以上の木をマークしなさい、といわれて調べたのですが、この森の中に直径1m以上の木が、300本以上ございます。直径1m以上の木というのは、環境庁のいう巨樹、巨木ということになります。たいへんな数があるなと思っております。しっかりと守っていききたいと思っております。今日はお疲れのところありがとうございました。

次回予告【第37回中部定例研究会】

- ◆日時：10月17日(日)・18日(月) (当初日程(10/24-25)の変更にご注意ください)
- ◆場所：伊良湖神社社叢・宮山原始林と白山比咩神社など
- ◆スケジュール：
 - 10月17日(日) 15:10 伊良湖港駐車場集合→伊良湖神社・神明社正式参拝
 - 17:00~19:00 講話 於：伊良湖ビューホテル会議室
 - 「伊良湖神社及び神明社の由緒について」
荒木田 健(愛知県神社庁田原支部長、神明社宮司)
 - 「宮山原始林及びその周辺の植生について」
長谷川 泰洋(社叢学会理事・名古屋産業大学講師)
 - 10月18日(月) 見学会：宮山原始林・白山比咩神社社叢
- ◆申込〆切：9月15日(水)正午

！！ 締切日が愛知県下非常事態宣言期間中の場合は中止いたします ！！

神社新報に社叢に関するコラム連載が決定

神社新報(神社新報社発行・週刊)に、当学会理事等が執筆を担当する社叢に関するコラムが、隔週で連載される事になった。

I 社叢とは何か、II 社叢と森林保全、III 社叢のフォークロアと地域コミュニティとの関わり、IV 都市における社叢の機能、都市景観と社叢、V 過去の災害で社叢が果たした役割ーの5つの大テーマ

のもとに、それぞれの専門に従い、社叢の歴史的背景や植生など、社叢学会ならではの学際的なテーマで社叢を多面的に取り上げる。連載開始は11月の予定。

社叢に関する疑問や管理上の悩みなど、取り上げてほしいテーマがあれば、お知らせいただきたい。

事務局から

● まさか2年越しでこのような夏を過ごし、大会までもが延期せざるを得ない状況に追い込まれるなどは全くの想定外でした。が、感染を恐れながら開催したところで、参加者はもちろんのこと、受け入れの秩父神社にとっても得るところはないと、今回の判断に至りました。悪しからずご了承下さいませようお願いいたします。

なお、事務局は、原則として月水金を出勤日としておりますが、今後の状況によりましては在宅勤務とすることもあるかと存じます。こちらでもよろしくご了承下さい。

● 下記の通り、『社叢学研究』20号への投稿を募集しています。研究者の業績評価にもつながりますので、ぜひご投稿ください。論文には至らない準備段階の研究ノートや、短報、身近な活動、社叢の訪問記(紀行文)もお待ちしています。

学術論文としての体裁を整えるための書き方や、引用文献、参考文献の扱い、記載の仕方については社叢学会のホームページに公開しています。お目通し下さい。(http://www.shasou.org/journal/format.pdf)

編集後記

おととと!! 大会案内は早めに出さなきゃ!と大車輪でほぼ記事を完成したところで理事長から延期の連絡が。。へ? じゃあ、そんなに急がなくてもよいわけ? と一気にのんびりモードに。ってか、何載せるの?! 記事ないじゃん!!

で、困ったときは過去を遡って言葉(誰のさ?)に従い、会誌創刊号をつらつら眺めていると、そういえば! 宮脇先生が亡くなったお知らせをまだしてないではないか。とはいえ、設立総会シンポジウムでのご発言を全部載せるほどの空きは、さすがにない。。とPCの中をコソコソ探していると、発言要旨らしきものを発見!

総会で配布したのかなあとそれらしいファイルをめくっても出てこない。ということは未公開? これしかない! 字数も頃合いだし。いつだったか、D.キーン名誉顧問が亡くなったときも、記事に飢えていたときだったなあ。皆さま、お優しい。ん?

今号は過去記事もりもりながら何とか紙面を埋められたけれど、大会報告でいけると思っていた次号はどうなるのら。この上はなんとしてもコロナさんに退散していただき、中部研究会を開催しなければ! 愛知の皆さま、何としても15日までにウィルスを放逐して下さい~い。(藤岡 郁)

掲 示 板

『原稿募集!』

『社叢学研究』第20号への投稿:論文、研究ノート、短報、資料紹介や調査報告(各400字詰原稿用紙40枚以内)と「鎮守の森の活動報告(祭、音楽会、調査、ワークショップなどの実施報告、抱える問題点など)」「社叢訪問記」(各1,200字程度)を募集いたします。締め切りは、論文等10月29日(金) 活動報告等12月24日(金) いずれも必着。

★ 会誌の投稿規程と論文の体裁、引用文献の記載方法を公開しています。投稿される方は、これに従って提出してください。http://www.shasou.org/journal/format.pdf

* 書評欄では会員の皆さま方の著作を取り上げています。出版された方は、ぜひご献本下さい。

東日本大震災社叢復興支援事業報告書 8年間の全てを記録 頒価 3千円

発行人 社叢学会事務局 〒604-8115京都市中京区雁金町373番地みよいビル303号
TEL・FAX 075-212-2973

URL <http://www.shasou.org> E-Mail shasou@ams.odn.ne.jp

社叢学会関東支部 〒368-0041 秩父市番場町1-1 秩父神社社務所内
TEL080-1514-5032 E-Mail shasougakkai@hotmail.com